

Title	Emil Reich氏の史学研究法(第一回)
Sub Title	
Author	田中, 萃一郎
Publisher	三田学会
Publication year	1909
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.1, No.1 (1909. 2) ,p.13- 40
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19090201-0013

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Emil Reich 氏の史學研究法 (第一回)

田中萃一郎

(一)

歴史家としてのエミールライヒ氏の聲價は疾に世間でも認められてる。日露戦争の起る前の年の末であつたと思ふ(三十七年十一月)波蘭のプロツホの名著の抄譯が「近時の戦争と經濟」と題して出版された時、ある元老の序文のうちに英國史家エミールライヒ云々とあつたので嘲笑を受けたとがあつた。實にライヒ氏はツングアールンはその北方の境に近いウパーエス市の人で千八百五十四年の三月二十四日(安政元年二月二十五日)に生まれ、ブラハ、ブダペスト、ウィーンの三大學に學び、ウィーン大學のドクトル、ユリス・シュニゲルシの學位を得てから數へ年で三十九になるまで五六年間専ら圖書館勉強をして居つたが、よし汗牛充棟も管ならざる書冊を讀破すとも到底史學の蘊奥を究め難しと翻然として悟つたので、茲に於てか列國に漫遊して實情を研究し以て書物の上の研究を補はんと決心し千八百

八十四年七月先づ米國に渡りて留まると五年、更に佛國にも前後四年の居諸を遣り、千八百八十九年の末から暫らく牛津に居つたが最後に英國に定住してからも最早十三年程になる。その間牛津ケムブリッジ倫敦の諸大學に聘せられて講義を試みし事も少からず、英國政府の囑託を受けてベネズエラ國との劃境紛議に關する調査に従事したともあるので倫敦の交際社會でも大分顔が賣れてるのである。氏は巴里淹留中千八百九十三年に夫人セリーヌラビユルと結婚したのであるが其結婚談は氏が好んで人に語る處である。夫人は當時寡居して居つたので初婚の際には勿論相應の持參金を譲られたが亡夫が之を浪費したが爲め一文をも遺さず剩さへ老父は再婚には資産を別たずとて頑として可かなんだ。ライヒ氏が語るのにその當時自分の所有金は僅に百圓しか無かつた所得はと云うたら一年に四百圓程併して五千圓程の債務を負ふて居つたのである。そこでこの事情を打明けて斯う云ふ次第ですが結婚して下さるかと思込んで申込んだら何卒と云ふのであつた。更に金錢の問題を根押しをされるとそんなことは意に介しませんと云うて呉れた。かくて結婚後數週間數ば執達吏に責めらるゝと云ふ仕末であつたが懸

て自分の運も開き直し、所得も次第に増加して一萬圓の額に達するとなつたので爾來益々幸運に向ふこととなつた。數年前に五百圓の小切手を初めて受取つた時は實に妻と夫婦で手の舞ひ足の踏むを知らざる程の喜ばしさを感じたが今ではまるで先頃も二千五百圓の小切手をポケットに入れたなり幾週間も打忘れて仕舞つたことがある。ヘレンカクストンと云ふ英國の閨秀作家がこの談話を評して英人にはかくまで無邪氣に一身のと財政のことまで打明けて話す人は少いのである。このハンガリアの先生が英國の士女を籠蓋して楽しんでその講筵に列らしむるのは一はこの種の罪のない話し方法を用ゐるからであると評してゐる。英國に於ける人氣はこの逸話でも認められ得る。

著述の既に公にせられたものも澤山あるが昨年の三四月の交に出版された西洋民族通史 *General History of Western Nations* は確かに大作である。出版されたのは第一冊西亞埃及希臘第二冊羅馬の二冊のみで第三冊基督教の起源以下は次を追ふて公にさるゝとのとであるが序文に據るにこの書はライヒ氏の畢生の著述たる史學全書 *Bibliotheca Historica* の脊髓を構成するものであつて、この史學全書は第一、重

要なる根本史料を蒐集せる史料選集 *Select Documents* 二冊(そのうち中古近世史に關するものは既に千九百五年に出版されてる)第二、歴史地圖三冊(そのうち英國史に關するものは千九百三年に古代史に關するものは千九百七年に發行されてる)第三、この通史の三種に分れてる。この通史はポップが言語學の爲にザヴィニーが羅馬法の爲に試みた處を西洋民族史の爲に試みんと云うので之と相干連して幾多の單行論文を公にし以て本書の各章に就て詳論を試むるの計畫なりと云うてゐる。而して本書の特色は史實に就て之が心理的根據を闡明せんとせるの點で史的綜合雜誌第九卷に寄稿した論文に *histoire livree* 紀錄的歴史に對して用ゐた *Esprit psychologique* 心理的歴史の體によつたもので幸ひ緒論にこの新研究法のことを詳しく説いてるから先づその要領を摘まんで見よう。

(二一)

人類は同情の念厚き社交的動物であるから種々の團聚を組織するものである。而してこの團聚は何れも歴史を有するので、家族も亦その制度を具へその事件を生ずること民族と憚ぶ處ないのである。其他村落制度の歴史もあれば教會制度

の歴史もあり、娛樂に民族的地方的家庭的の區別があれば隨てヘラス國オリムピア遊戯史もあればスイーン市ワルツ史もあるのである。併し這般の團衆のうちには事件の乏しくして制度の整へるものも亦少からぬ。家族の如きは之が一例でその日常の事件は家族制度運用の結果に外ならぬので家族殊に一夫一婦制の行はるゝ家族の真相は靜的スタティック即ち制度的であつて動的ダイナミック事變は是をして悲痛を感じしむるの常である。之に反して軍隊の如き團聚は動的なるを以て其生命とし事件を豫期するのみか是を挑撥するとさへある。國家も亦時に靜的たるよりは寧ろ動的たることがある。そこで有機的現象を靜的と動的とに分つが如く、人類の團聚をも分類すると出来る。

今歐洲に於ける靜的團聚を列舉して見ると、家族、農團露國のミールの如きギルド、社會上の階級、同職業者等である。但し這般の團聚は時と處とを問はず必ず靜的であると云うのではない。*ニテ*は *Il ne faut jamais dire jamais* と云うたが、この金言は最もよく歴史の場合に當て填るのである。併し前記の團聚は何れも制度的性質を帯びてるので、個々の事件の影響を感ずることは割合に微弱である、隨て

其活動は着實で之が範圍も亦局限せられてゐる。茲に一言注意を要するは所謂靜的團聚の場合は婦人の勢力侮る可からざること、婦人は天性靜的保守的であるからその勢力ある團聚は連續的性質を帯びて單調に陥るである。團聚のこの性質は民族と娛樂との關係を觀察しても推測される。即ち民族の靜的團聚が動的團聚を壓抑する時は國民は大に娛樂を要すること、なるので、人民の動的活躍を好まぬ專制治下の民族は動的制度の大に行はるゝ民族よりも遙かに快活で娛樂に耽るのである。上古に於ける快活な埃及人と眞面目な羅馬人とを對照し近代に於ける娛樂に耽て露西亞人と陰氣な瑞西人とを比較して見れば略ぼ了解されるが、停滯不動の状態にある西班牙人が闘牛戲の如き觀客を興奮せしむるが如き遊戯を有するに反して動的活力に富める英佛等の民が比較的ツマラヌ娛樂に満足してゐるのも同じ理由で判ぜらるゝのである。娛樂に耽るの程度に依て一國の靜的團聚が動的團聚を凌駕してゐる否やを判ずることが出来るのである。以上の例證を見ても靜的團聚即ち社會的團集は概して自然科学の範圍に屬する事實と同じく規則正しき處があるので、千七百五十年以來彼の自然科学の法則發

見に用ゐられた研究法を應用してこの社會的團聚發達の法則を發見せんとした學者は少からぬとである。其重なるものを擧ぐればチユルギー、コンドルゼー、バツクル、スペンサー、ページョット、コント等である。靜的團聚に關する現象が概括を試み易きものであつて隨て之が法則を歸納し得可きことは云ふまでもない、例へば各民族に就て觀察するに或は異族結婚制を探るあり、或は一妻多夫制を行ふあり、或は一夫多妻制を行ふあり、或は一夫一婦制を守るあり、或は短期結婚制によるあり、その理由を闡明して人類結婚制度の法則を立つることは出來難いことではない、何となればかゝる制度は社會上經濟上倫理上の輿論と必要とに基けるもので個人の氣まぐれな意志では之を如何ともし能はぬのである。都市の位地の選擇に關する法則も亦將來の歴史家によりて定めらるるであらう。その他すべて個人の意志によりて左右し難い靜的事實に對しては早晚之が法則を究め得る事期して待つ可しである。かくいへばとて勿論所謂動的事實に對してもかゝる法則を發見し得可しと信ずるのではない。柳も事實には時に動的と認む可く時に靜的と認む可きものがあるが、靜的なる時は之より法則を歸納し得可きも動的

なる時は之をなし得ぬのである。この區別を明瞭にせぬと大なる誤謬に陥り易いのである。一體制度が或は動的となり或は靜的となるので、動的制度靜的制度和云ふ熟字は既に誤解の基である。例へば宗教に就て見るに古代希臘羅馬では靜的制度であつたが、トリエント會議以前の基督教は全然動的であつた。又社會上の習慣規則は如何かと云ふに近代の歐洲では殆んど靜的であるが上古はむしろ動的原因より起れるものであつた。古代のアテネでも近代の佛國でも食事の初に純なる葡萄酒を一杯飲むと云ふ美しい習慣がある。アテネ人はこの習慣を明君アムフィクトンの制定に係るものであると信じてゐたが、佛國の歴史家は一人としてかゝる靜的習慣が帝王の命令に基くものとは見做さない。動的團聚の我儘な性質を等閑視し、靜的制度の時に動的と變ずるの事實を忽藩に附して容易に歴史上の法則を定め得可しと信じたのは英國のバックルである。バックルは歴史を生理學地質學と同じく科學的にせんと熱心から史實の法則を發見せんと試み史學界に一大改革を促したのでその名聲は歐洲大陸の學界に喧傳せられてゐるが、動的事實を靜的事實なるかの如くに研究せんとしたのは根本

的失策で、英國文明史はかゝる研究の不可能なることを證明してゐる。故にこの書一度公にされて以來史家は數ば歴史上の事實には一人若くは少數の人物と密切の關係を有するもの多く謎語中の謎語と云はるゝ不可解なる人格パーソナリティとの問題に關連せるが爲到底測知し難きものであると明言した。人性を深く研究した人は對象の人格を具ざるものほど概括を試み得可きことを認め得たであらう。動物界の事實は最も是を概括するに適し植物界之に次ぎ動物界更に之に次ぐのであるが、人類に至りては記述描寫は能く之を試み得可きも、之を概括して公式を定める譯には往かぬ。科學者は一疋の狐を觀察するに方りその特性如何を問はず單にその種の一標本として之を研究するのであるから能く通則を定め得るが、人間は之に反して標本ではなくて變化窮りなく得て端倪す可からざる人格その物であるから、例へば歴史的人物の通則から演繹してシーザーの生涯を測知することは決して出來得られぬ。即ち人格の影響を受くる事著るしい史實は科學上の法則によりて律することは出來ぬのである。例へば動詞の語尾の變化の如きは法則を以て説明し得るが作者の文體はかくすることが出來ぬのである。(佛人 *Emil Reich*)

not. は千八百七十二年に公にした *Considerations sur la marche des idées et des événements dans le temps moderne* のうちに *Faits et lois* との區別を建て事實は不規則であるが法則は規則正しいと説いてゐる。歴史界の事實と自然界の事實とを混ざるは不都合であるが、その歴史に對する見解は本書と同一である。但し動的團聚の研究に際して概括的法則を立て得たぬとしたならば歴史家の考究は徒勞に屬するが如きことはなからうか、歴史は科學たるの品位を棄て、藝術たるを以て満足せねばならぬことになりはせぬか。

歴史は科學ではない科學となることは出来ぬと云うた學者は少くはない。例へばシヨーパーナワは歴史は事實の排列に過ぎぬから科學の資格を失いて居る、知識ではあるが科學ではない、何となれば理化學等に於けるが如く一般の通則から個々の場合を類推することは出来ぬ、個々の場合は直接に之を實見して確かめねばならぬと論じてゐる (*Die Welt als Wille und Vorstellung*, II. chap. 38.)。Stanley Jevons も史學と云ふ熟字そのものが既に不合理な總念である、國民は元來複雑な關係で結合されてゐる有機體である些細な出来事の爲に歴史の方向を一變することも亦珍ら

しくないと説いてゐる (*The Principles of Science*, chap. xxxi.)。云ふまでもなく動的團聚の研究に際しては科學者の間に用ゐらるるが如き意味に於ての法則は發見されぬが、之は何も驚くべきことでも失望す可きことでもない、自然界にまれ人事界にまれ研究の對象の相違する毎にその方法をも亦異にするのである。例へば自然界の事實を發見するに方りて必要な觀察も數學には何等の効なく、如何に觀察の度數を重ねてもイェークリッド第一卷の定理を發見し盡くすことは出来ぬ。美學の場合でも同様でレッシング以前にホーマーの詩篇を讀んだ人は幾千人の多きに達したか知れぬが、ホーマーが物象と人物との詳叙を避けたとの事實を發見するのは實に審美眼の高いレッシング出づるの日を俟たねばならなんだ。而して研究の方法相違するに隨てその結果も亦異なるのである。即ち數學では定理を得、星學理學化學では確かな法則を得、博物學では常住不易の事實の觀察から稍や漠たる法則を得分類を容易ならしむるが、歴史就中動的團聚の研究に於ては單に一の事實と爾余の事實との相依相從の關係を明にし得るのみである。歴史上の事實は自然科學に於けるが如く公式の一例と認むることは出来ぬが歴史界に

於ける相依相従の關係は自然界に於けるよりも遙かに豊富で往古より今日に至るまで連綿として絶えぬのである。

史學は相依相従關係を究むるの學なりと云ふ可きである。自然科学にも不思議な關係意外な一致を見ることがある、例へばダーウインは碧眼白毛の猫は鼯で長脚の鴿は短頸であるがその理由は解し難いと云うてる。民族の史上にはかゝる相依相従關係は澤山見受けられる。例へば希臘の都市的國家とオリムピアその他の競技會と、デルファイ或はドーダナの神託との間には直接間接の相依關係が存してゐる。又品性と意志との教育に重を置く英國のバプリックスクールと派手な理想を斥けて實着な歸納的思想を喜ぶ英人の氣風との間には隱微な相従關係が認められる。若し歴史家にして二個以上の歴史上の事實若くは制度に就てその眞實の關係即ち心理的關係を闡明し得たならば確かに歴史上の見識を進めたものと云ふ可きである。抑も歴史の内容は主として制度と事件と人物とより構成されるので普進事實フツジンジツと呼ばれる、事件と人物とは兎も角制度は靜的であるが上に數ば繰り返さるゝ事がある。歴史は果して繰り返すか如何かと云ふに制度に於

ては然り事件と人物とは然らずと答へ得る。故に希臘羅馬の制度に似たる近世の制度を直接に研究すれば自から希臘羅馬の制度に就て心理上の眞相を看破する事が出来る。だから各國に長く滞在する事は過去を研究するの要件で旅行したことの無い歴史家は實驗室を備へぬ化學者と同じである。英米佛獨等文物制度を異にせる諸國に漫遊してこそ初めて實際に就てその相互の關係を會得し時間と空間とに於ける特殊の歴史上の事情によりて定められたる心理上の原因を了解し得るのである。Hoyと云ふ米國の歴史家は宗紀裁判の歴史を著してオックスリチーだと云はれてゐるが、單に事實を蒐録したのみで宗紀裁判の根底に横はれる心理上の關係を釋ねやうとして居らぬから歴史とは認められぬ。この相依相従の關係を闡明してこそ歴史家は科學者を凌ぎ得るのでこれが歴史家の本務である。而して靜的の制度に就ては勿論更に動的な事件に就ても之が相依相従の關係を攻究し得るのである。

歴史の動的現象には勿論偶然の事變意外の而も有力な事件が乏しくないので歴史家のうちには才筆に任せて些々たる出來事から重大な結果を招いた様に敘述

した人も随分ある。その多數は確かに事實を誇張して居るには違ないがさり連歴史上に於ける些々たる出來事の影響を否定し閑却せんとするのは大に間違つてゐる。些事の影響を承認するのは即ち法則の存在を否定することになるから、歴史上の法則を發見せんと欲する學者は事變に重きを置くこの歴史家に極力反對を試み歴史は些事によりて動さるとの假定説を唾棄し愚弄する。併し我輩は法則を發見せんとするのでなく相依相從の關係を闡明せんとするのだから、無責任な出來事の爲にはさ迄の邪魔を受けぬのである。裏面に相殺が行はるゝのかゝる無責任な事件は相依相從の關係を定むるには不充分である。佛人クルノー (Cournot, Exposition de la théorie des chances et des probabilités, Paris, 1843-73) の定義によるに偶然の事變とは二個以上の相互に獨立せる原因の湊會して生じたる事實である。故にその事實が實際二個以上の相互に獨立せる原因の相依相從關係を生ずる時は必ずや双方の原因に影響せねばならぬ、何となれば一方にのみ影響して双方に影響せなければ相互的な相依相從關係を生ずることは出來ないのである。之に反してその事實が元來の相依相從關係を一變する場合には極めて重大

で明瞭で亦偶然の事變と認め難くなるであらう。一二の實例を以てこの大切な點を説明すれば、千七百六十二年の一月一日、即ち七年戦争の第七年目にはフリードリヒ大王は絶望の域に陥つて居つた。英國は前年十二月十二日以来復た軍資を供給せず、他の財源は全く涸渇し、國內の要塞は敵軍の有に歸し、軍隊は意氣沮喪して復た闘志なきに、敵兵は英氣勃々として當り難く、殆んど萬事休矣と云ひ度い窮境に陥つた。恰かもこの時偶然の事變が起つて局面を一變した様に見えた、即ち一月の五日にフリードリッヒの宿仇たる露西亞の女帝エリザベータ崩じホルスタイン、ゴットルフ公之に代て位を襲ふた。新帝彼得三世は日頃普王を景慕して居つたので早速普王に對する敵對の行動を中止した、かくてフリードリッヒは新に戦争を繼續して最後の勝利を占むる事が出來た。このエリザベータの折好く崩じたことと彼得がフリードリッヒを欽慕して居つたこととは偶然の事變ではあるがフリードリッヒの位地と機會とに至大の影響を及ぼしたが故に何人もその重要なことを否定する譯にはいかぬ。併し問題はその影響の範圍は何れの點まで及んでるか云ふのである。即ちこの偶然の事變は當時の政治關係の推

移を促進し着色したのみであるか將た又全然之を一變したのであるかと云ふのである。而して我輩はフリードリッヒの運命はこの偶然の事變の爲に何等根本の變化を受けたのでないと斷言する。露國は元來普國を削りて奥國の領土を膨大ならしむるを以てその國利となさぬのである。既にエリザベータの在世中のことである奥國はクーンースドルフで(千七百五十九年八月十二日に)聯合軍が普軍を撃破した後露軍に向て協力之を全滅せんことを提言したが容れられなんだ。成程千七百六十二年の七月にエカテリーナの帝位を慕奪するや直ちに(七月九日)詔勅を發して露國の宿仇フリードリッヒに對する不遜の意を明言した。併しその翌日七月十日にエカテリーナは親からフリードリッヒの大使男爵ゴルツに向て彼得三世の對普政策を變更するの意なしと告げたのである。主權者その人を變ふるとも露國の國是は動かぬのである。他の例には千八百年のマレンゴの戦に際しデセーの來援でナポレオンを死地より援ひ出したと云ふ有名な出來事を取らう。今日では戰略上奥軍の運命は戰端に先て夙に定まつたと認められてる。單に戰術上から云ふたならナポレオンは失策をしたのであるが、敵將メラスの

戰略上の過失は到底挽回し難きものであつた。デセーの不時の來援は確か最後の結果を促進し着色したが、來援せねばとて戰役の勝敗を轉倒するが如きことはなかつたのである。

現代の歴史家の多くは殊にこの最近六七年歴史上の偶然の出來事に明瞭なる説明を加へんとするのを非難する。獨逸のエツアルト・マイヤー、佛蘭西のラングロア、英國のヨーク・ポウル等は何れもその鏘々たるものでセニョーボ、ラングロア兩氏の歴史研究法(千八百九十八年)二百五十三頁には左の如く大膽に論じてある。曰くあらゆる事實の歴史は即ち偶然の事變の明白争ふ可からざる連續にして一事變は必ずや他の事變の原因を構成せりモンゴメリの槍傷はハンリ二世の崩御を招ぎ王の崩御はギイズ家をして要路に立たしめ、その結果新教派の零落を來せりとある。佛國の歴史をのみ研究して居つたなら如何にも適切な評論であると思ふかも知らぬが、當時の歐洲列國の歴史を一瞥すると他にもギイズ家に似た例は珍らしくないのである。即ちウンガールンには Zepolyais 出で瑞典にはツツサ家出で奥國にはワレンスタイン出で、何れも國內の富裕な貴族であつて

而も王位を窺偷したその事情は少しも佛國のギイズ家と異ならぬのである。そのうちでワッサ家の外は何れも野心を遂げ得なんだが、當時佛境匈瑞の四國に新王朝の興らんとするの大勢のあつたとは明である。モンゴメリーの不器用な槍術の手煉を以てギイズ家の勃興を説明しやうとするのは全く此大勢を無視せんとするものである。伯林の教授エツアルトマイヤーは *Zur Theorie und Methodik der Geschichte* (Halle, 1902) の五十頁にビスマルクの政界に出でたのは全く一議員の病めるに方りて之が代理として偶然聯邦州會に出席せるが爲であると云ふてる。而して教授は近頃ビスマルク惟一の事業は獨逸の統一であると明言したが、獨逸國民は果して聯邦州會の一議員の病に罹つたのを徳とせねばならぬのであらうか。假りに議會の一議員の不消化に苦む微らせばビスマルクは遂に政界に入るの日なく又ビスマルク出でずんば獨逸の政治上の統一は成功し得ざりしとするもビスマルクと時を同うして他の歐洲の兩國に政治上の統一獨立に盡瘁せるビスマルクを出した事實は注意を價する。即ち伊太利にはカヴール出で、二千萬人以上の伊太利人を統一しウングールンにはフランシス・デアク出で、一千二百

萬人以上のウングールン人を統一し獨逸に於けるビスマルクの事を行ふたが、カヴールの場合にも將たデアクの場合にも偶然一議員の病蔭に臥したが爲その出身を容易ならしめたと云ふが如き事情はない。蓋しビスマルク、カヴール、デアク等の事業はかゝる些事の上に超然たる大勢の然らしむる處で前世紀の六十年代には獨伊匈の三國共にその統一を助長す可き特殊の事情が存してたのである。歴史家はこの特殊の事情の説明に全力を傾注す可きので些細な出來事に誤られてならぬ。ビスマルクの事業は一議員の幸に病に罹つた結果であると云ふならば我輩は寧ろこれ全くそのポムマーンの乳母の幸に強壯であつた爲であるとは説明し度くなる。蘇格蘭人ジョン・ローの巴里に於ける投機事業の如き殊に不可思議の現象で如何して前後四年間佛國で非常の勢力を占め得たが、佛國の歴史との關係を釋ぬるに實に困難である、而も相前後してピアツェンツァの Alberoni、グロニンゴンの Ripperda の、アドリッドに於ける Goetz の瑞典に於ける Menschikov の露國に於ける并にハレーの Struensee の、コッペンハーゲンに於ける投機事業の起つたのを見る時は容易に常識でもつて第十八世紀の前年には歐洲各國に野心的冒

險の成功を挑撥するの事情が存して居つて第十七世紀若くは第十九世紀とその趣を異にせるの次第が察し得らる。この特殊の事情を指摘しその心理上の相依相従關係を説明するのが歴史家の任務である。故に須らく活眼を開いて文書の裏面を洞見しレントゲン光線でもつて過去を照し出さねばならぬ。

要するに偶然の事變は相依相従關係の細目に互りては之を變更することあるも大體の關係には變化を及ぼすものではない。若し然らば歴史は講談と毫も慥ふ處がないのである。抑も歴史は主として人類の團聚に就て論究するものであるが團聚の行動は個人の行動のやうな不規則な氣紛れなものではない。團聚には自から特種の現象があつて單に之を組成せる個人の現象の總計と同一視する譯には往かぬ。家族でも群集でも市參事會でも軍隊でも船員でも學生團でも眞面目に行動する時はその特徴を發揮せざれば止まぬ。誰でも多數に制せられて心にもない舉動に出ることがあるもので、個人として温順な人も多數相集る時は無慈悲な事を敢てする様になる。民衆心理學の問題は餘り研究されなんだが民衆の領袖は必ずや能く之を會得して居るであらう。又民衆病理學の問題もある。

これも同じく閑却されたが、人類團聚の生理病理に關する研究を積んだなら偶然の事變の爲に歴史の研究の妨害を受くることは少くなるであらう。歴史上の偶變は恰かも蒼天の彗星、流星の如く實に澤山ある。星學者の研究法に就て學ぶ可きではあるまいか。

併し歴史上の相依相従關係の性質を誤解してはならぬ、と云ふのはこの關係は正確ではあるが不變でない、即ち一時代の事實にのみ關するものであるからである。勿論時には恰かも不變なるかの如く認められぬでもない、例へば上古に於ける野蠻人と希臘民族、拉丁民族、フエニキア民族との關係は多くの類似の點を有するが、而もその野蠻人の影響は一々特別に之を研究せねばならぬ、相依相従の關係を推し擴げて未開民族と文明民族との觸接を悉く之に依て律する譯にはいかぬ。例へば南阿に於ける英民族と黒人との關係并に北阿に於ける佛民族とパーバリー部族との關係は全く上古史上の實例と異なるのである。さて史的研究の科學的成果たる歴史上の相依相従關係が局部的部分的であつて概括力を缺いて居るとしたならば彼の科學の精神、神髓たる可き統一と系統とは果して史學には望まれ

ぬであらうか。歴史とは切々な史實の蒐集に過ぎずして真理の焦點たるを得ぬであらうか。史學の統一はその主題その物によりて保證されてる、過去四五千年來事實上唯一の歴史あるのみで西亞歐洲諸民族の歴史は統一されて居るのである。列國史の研究に先て通史の研究必要なるは之が爲である。歐洲の一國の歴史は他國の歴史と密切なる關係を有してゐるから歐洲史の精確なる知識なくんば到底英國の歴史を解することは出来ぬ。如何に英國の歴史に精通してもそのみでは英國の歴史は解せられぬ、これは恰も名詞か代名詞か働詞の缺けてる文章の意味を捉へやうとすると同様で歐洲史の或る時期には英國が名詞となり佛國が形容詞となり伊太利が働詞となつて文章を構成して居つたのである。故に國內史の立場ばかりに由らず更に歐洲史の知識をも借りなければ歴史上の事實を眞に了解し難いのである。ヘラクリトスの哲學の單純にして而も深奥な意義を歴史の上に當て篋めて、國民は存在せず常に成立の途にありと云ふことが出来る。其意は國民の歴史は隣邦民族と衝突の經過にあるので其歴史を構成するの眞因は國民その物に存するのではないと云ふのである。例へば英佛の衝突は英國史

上若くは佛國史上の最も重要な部分で、佛民族が劣等であつたなら英民族も亦唯伏し了つたであらう。歴史も亦あらゆる經過プロセスの常として必ずや積極消極兩面を有するものである。

歴史を解するには民族の歴史に就て一般の事實と特殊の事實とを區別せねばならぬ。すべての事實が即ち歴史上の事實であるのではない。英米では頻りに事實を重ねるので大に學生を惑はし、歴史家は事實を擧げて呉るればそれで可いと云ふので事實豊富とは即ち良史の形容詞であるかの如く心得てゐる。隨て思想を即ち事實の説明を閑却し蔑視し思想は即ち理論に涉ることとで理論はすべて間違てるアイザックニュートンも臆説を立てたことではないと云ふてゐるではないかと唱えてゐる。併し光學機械學星學の何れに於てもニュートンほど理論臆説を立てた人はない、唯ニエトンはケプラーの様に當否を問はず立證の出来て居らぬ臆説を發表することを避けたと云ふのみである。一體學理から離れた事實と云ふ者は無いのである、官能の感覺に關する些細の事實でも學理によらざれば之を記述することが出来ぬ。シローグイスは佛國を征服し佛人の王となれりと云

ふは事實を平叙したのみで佛國史家が數ば反覆して用ゐた處であるが、これほど間違つた記事はない。これは羅馬帝國に住へるチユートン民族の間に行はれた王制に關する學說が誤て居つたので、クロイツイスは佛國を征服したのでもなければ國王となつたのでもない。僧都ヂューボ、カルニエー、フユステルド、クローラ、ンジ、等が他年論争した後漸くこの謬說を打破してクロイツイスの地位を明にすることが出来たのである。事實と思想とを割かんとするのは宛かも吸入のみで呼吸せんとするやうなもので、事實と思想との關係は舊教徒の結婚と同じく離婚の出来ぬものである。故に我輩は臆說を非難せずして却て之を増加するの困難甚しきを悲むものである。不幸にして歴史上の事實の重なる部分は觀察者の肉眼に映し出さぬ、大國民の歴史に於て最も興味あるは心理上の事實であるが、これは事實のみ舉ぐる歴史家の著書には認められぬ。之を看破するには眼と耳とのみを働かせた丈ではその效がないので爲めに聰慧な民族でもその社會上政治上の狀態の相依相從關係に氣附かぬのである。例へば佛國の抒情詩は大に英獨兩國に劣てる、而してこの缺點は妙齡の女子と青春の少年とを離隔して抒情思想

の勃興を妨げてゐる爲から來て居るのであるが、佛國の學者は何人も未だ之を道破せなんだ。

であるから歴史は所謂事實にのみ拘泥して居る譯にはいかぬ、須らく思想の光明を假りて事實の現像を映し出さねばならぬ。而して等しく事實と云ふても總念を與ふる者と否らざるものとの區別がある。或は濛々たる長江の如く、峻嶺の起伏を示し地方の花卉を制し交通貿易に便し住民の防備に任じ大都の位地を定むるものがあり、或は溪湖の細流の如く少數の住民には有益でも國民には無用なるものがあり、或は深山の小湖の如く風景畫よりも美しく詩材饒かなるも實用のないものがある。事實も亦かくの如くであるが、さてかく區別をなせばとて敢て歴史家は重大な一般的事實をのみ研究す可しと云ふのではない。歴史家は須らくあらゆる事實を精細に研究せねばならぬが、併し一度史筆を振ふや重要な事實のみを記さねばならぬ。而して通史に於ては一般の事實が最も必要である。その通史が稍や完備した曉でなくては満足な歐洲列國史を撰述することは出来ぬ。通史は之に必要なく可からざる緒論である。この緒論總論の缺乏せるは疑もなく

學問の後れて居る徴候で進歩せる科學には皆之を具へて居る。即ち物理學でも化學でも生理學でも解剖學でも星學でも羅馬法學でも言語學でも皆緒論總論のないものはない。殊に言語學の歴史は最も適切に學問の總論の緊要なることを例證する。第十九世の初迄は希臘語拉丁語の學習は純粹の記憶にのみ依つたもので語原の問題も文典の問題も暗黒のうちに葬られて居つて、之が研究者は宛かも暗夜にほの暗き一丁の蠟燭を便りとして壯麗な宮殿を辿るやうなものであつた。處がアールヤ語族の互ひに相關係せるの事實一度發見さるゝや希臘語拉丁語の語原上文典上の問題は又を迎ふが如くに解決せられ宮殿の研究者は煌々たる日光の力を借りて規模建築の概念を得ることが出來た。語を換えて云へばアールヤ語族の總論が明かになつたので初めて希臘語拉丁語の性質を容易に解し得るやうになつたのである。

併し梵語、波斯語、希臘語、拉丁語、ゴート語、ケルト語等の文典を機械的に蒐集してもアールヤ語の文典を構成し得ぬと同じく印度、波斯、希臘、羅馬その他英佛獨等の歴史を機械的に蒐集しても西洋民族通史を構成することは出來ぬ。以上の各國語

とその文典とに通曉してもアールヤ語學の觀念を得ることは出來ぬそれはアールヤ語學には専ら一般の事實をのみ説くからである。明諭シリで云ふと、國際私法と同じやうな關係で、國際私法は元來歐洲列國の法典に淵源して居るが而も之と獨立して特殊の法規となつて居る。通史も亦その材料は主として列國から採るのであるが單に列國史の摘要註釋ではない。通史を構成する事實は明かに特有の事實である。その他の事實と異なるは宛かも生理上の事實と化學上の事實と異つて居る様なものである。生理上の事實は勿論之に伴ふ化學上の現象なくしては生む能はぬが彼此の同種類に屬せぬことは疑ふを要せぬ。歴史の場合でも同様で通史の事實は特殊の事實とは決して同種類のものでない。兩種の事實の相違は甚しいから主ら一方の研究にのみ從事する時は規則として他方の研究に對して趣味と技術とを失ふのである。通史を研究するものも亦専門家で一般の事實の研究を専門とするのである。醫學では概論の學習を経た上でなければ専門家となることが出來ぬが、史學では之に反して専門家は概して世界史家を蔑視し、世界史家は又土龍仕事を嘲つて居る。専門家は有名な分業ディヴィジョンの主義ドクトリンを楯にして居るが科學

の上では分業よりは専業（ゾーフアレシエンチオン）の主義に依る可きである。歴史上の時期を算術的に分割してその一時期宛を研究せんとするは分業ではなくて業務を寸断するのである。機械的に分割した一時期の研究者は概括的研究者よりも遙かに多くの誤謬に陥てる。歴史學の上の專業は須らく通史制度史兵事史商業史文學史等に分たる可きである。併し一生を委ねて例へば第十二世紀の英國史を研究した學者はオッソリチーたるの名著を作るかも知れぬが通史の教訓を缺いてる時はその時代の知識の上にさへ貢献することは出来ぬ。本書は乃ちビシヤーが解剖學の爲にポップ并にポットが言語學の爲にザヴィニーが羅馬法の爲になし遂げた處を史學の爲に試みやうとするのである。

SOME ASPECTS OF CHARITY AND PROVIDENCE.

(E. H. Vickers.)

In dealing with needs which result from misfortune or incapacity, men have always used two methods: charity and providence. Both are fundamental. Both must always have a place—whatever be the form of society or the system of economic organisation. The problem for a progressive society is to ascertain the true function of each and then to organise or practice both charity and providence in accord with scientific principles. To throw light on the functions of charity and providence and the scientific principles involved is therefore to make a contribution of practical value.

In early times, problems of charity and providence were relatively simple. The patriarchal organisation and the mediæval corporations represent small and compact groups, with close mutual relations, interests, obligations and understanding, which could meet practical needs by mutual and effective co-operation. In such small groups, personal knowledge and mutual sympathy and interest made scientific principles of action unnecessary. Outside of those circles of mutual and effective as-